

V. ジャンケレヴィッチのノスタルジー論

——「閉じたノスタルジー」と「開かれたノスタルジー」を中心として——

島村幸忠

1 ジャンケレヴィッチとノスタルジー

フランスの哲学者ウラジーミル・ジャンケレヴィッチ（1903-1985）が最後の主著『不可逆なものとのノスタルジー』（以下では『不可逆なもの』と略記）を上梓したのは、1974年のことである。同書の主題は、その題名からも明らかなように、ノスタルジーに関するものであった。結果としてではあれ、ジャンケレヴィッチは最後の主著でノスタルジーを扱うことになったのだが、この事実は彼においては如何なる意外性も有していない。というのも、彼にとってノスタルジーとは、常に一つの大きな問題として論じられるべき可能性を持つものだったからである。

実際、ジャンケレヴィッチの著作のなかにノスタルジーが登場する時期を特定しようと思えば、彼の道徳哲学の出発点にあたる『疚しい意識』（1966、初版の『疚しい意識の価値と意味』は1933）にまで遡らなければならない。同書において、主題の悔恨（remords）と対照的な感情として哀惜（regret）が論じられているのだが、ここでの哀惜はノスタルジーとほとんど同義である。悔恨とは、取り消したいと望みつつも取り消すことの出来ない過去に対して抱く道徳的感情であるが、反対に、哀惜あるいはノスタルジーとは、後にも詳察するが、不可逆な時に起因し、取り戻したいと願いつつも取り戻すことのできない過去に対して抱く、美的な感情である。このようにノスタルジーを美的なものであるとする考えは、晩年の『不可逆なもの』まで受け継がれることになった¹。

1 ノスタルジーの美的性格を逸早く指摘したのは、エチエンヌ・スーリオ（1892-1979）である。スーリオのノスタルジー論に関しては、以下を参照のこと。Étienne Souriau, “La nostalgie comme sentiment esthétique,” *Revue d'esthétique*, 1949 4-6, (Paris: Presses universitaires de France, 1949), pp. 229-253; Souriau, Étienne. / Souriau, Anne. ed., *Vocabulaire d'esthétique* (Paris: Presses universitaires de France, 1990), p. 1073; 春木有亮『実在のノスタルジー——スーリオ美学の根本問題』（行路社, 2010）, 195-210 頁。また、美学的な問題としてジャンケレヴィッチのノスタルジー論を扱ったものとしては、以下を参照のこと。西村清和『フィクションの美学』; 拙論「ノスタルジーの両義的側面——V.ジャンケレヴィッチの『不可逆なものとのノスタルジー』を中心として」『第63回美学会若手研究者フォーラム発表報告集』（美学会, 2013）
<http://www.bigakukai.jp/taikai63/wakate-houkokushuu.pdf>.

またジャンケレヴィッチにおいては、ノスタルジーの対象が、過去の事実以外のものを示していることもしばしばある。例えば「何だかわからないもの」などといった術語で表される超論理的、あるいは超経験的なものが、その対象となることがある。『何だかわからないものほとんど無』（以下『何だか』と略記）の第1巻の冒頭では、ノスタルジーは不完全性のパトスと言い換えられており、「何だかわからないもの」の認識、あるいは経験の不可能性を表す感情である（Cf. *JNSQ I*, pp. 11-12）。

以上の通り、ジャンケレヴィッチ哲学において、ノスタルジーとはすでにその出発点から無視せざるべき問題だったのだが、第二次世界大戦、あるいはアウシュヴィッツの悲劇を契機に、その重要性がさらに増したとも考えられる。というのも、ルシアン・ジェルファニョンが指摘している通り、これらの歴史的な事件以降、ノスタルジーと深く関係を持つ「個の唯一性」や「出来事の一回性」がより悲劇性を帯び、特にタナトロジーを中心とした彼の哲学において重要な意味を持つようになったからである（Cf. Jerphagnon 1970, pp. 165-167）。「個の唯一性」や「出来事の一回性」に関してジャンケレヴィッチが自身に負わせていた課題は、それらが膨大な時のなかに埋没していくこと、あるいは暴力的な忘却によって無と化すことから、それらを救い出すことであった。また、その論旨を端的に示せば以下ようになる。すなわち、「個の唯一性」や「出来事の一回性」は、あったという事実あるいは起こったという事実として、つまり過去の事実として、本質的な虚無化からは永遠に逃れる、というものである。そしてまた、それらが存在した世界と存在しなかった世界とがまったく異なるものであるとして、それらが有する尊厳を確固たるものにする、というものである²。このような議論は『死』（1966）を中心に行なわれたが、『不可逆なもの』においても再び論じられているのである。

ところで、ジャンケレヴィッチにおいては、ノスタルジーは常に積極的な意味を有するものではなかったことも指摘しておく必要がある。事実、形而上学における彼自身の態度を表明した『第一哲学』（1954）においては、消極的な意味でノスタルジーが登場する。そこでは、「曖昧で、またそれゆえに両義的な人間は、ノスタルジーと使命の間におかれている」（*PP*, p. 245）とされ、静的な状態に留まろうとするノスタルジーは「行為なき存在への自己満足」とであるとされている。また、1963年の『冒険・倦怠・真摯』（以下『冒険』と略記）においても、ノス

2 このことに関しては、『死』の次の言葉を引いておく。「この存在した〔avoir-été〕はアウシュヴィッツで虐待され、殺された無名の少女の幻のようなものだ。その少女のささやかな地上の生が営まれた世界は、根源的に、そして、永遠に、それがなかった生とは異なる」（*M*, p. 465, 507 頁; Cf. *II/N*, 251, 321 頁）。

タルジーは、未来へ踏み出そうとする冒険好きの好奇心とは正反対のものであり、冒険者の気力を失わせるものであるとされている。

以上のように、ノスタルジーをめぐるジャンケレヴィッチの態度は両義的なものであるが、それは、未来と過去に挟まれ、それらと真剣に関わる実存をどうにか捉えようとする結果によるものであるだろう (Cf. *Inach*, pp. 63-64, 66-67 頁)。ジョエル・アンセルが指摘している通り、「存在よりもむしろ行為の形而上学者であるジャンケレヴィッチが、行動に重要性を与えていたことは、周知の通りである。それにもかかわらず、ジャンケレヴィッチは、実践の要請と未来の名の下に過去とノスタルジーを軽視する活動主義に抵抗する」(Hansel 2012, pp. 64-65)。そのようなジャンケレヴィッチ自身の両義性が、『不可逆なもの』に凝縮してあらわれている。

以下では、『不可逆なもの』を中心に、ジャンケレヴィッチのノスタルジー論を考察していく。その際の議論の軸となるのは、同書の最終章である第6章「ノスタルジー」で議論されているノスタルジーの二つのかたち、すなわち「閉じたノスタルジー」と「開かれたノスタルジー」である。これら二つのノスタルジーが中心に論じられている同章は、特にジャンケレヴィッチのノスタルジー論における重要な箇所である。しかしその一方で、この箇所こそが、それを理解する上での躓きの石にもなっていると考えられる³。というのも、ジャンケレヴィッチのいう「開かれたノスタルジー」は、単に故郷を懐かむであるとか、過去の思い出に浸るといったような、一般的に理解されるノスタルジーとは異なるからである。

しかし、その箇所に至るまでに、ジャンケレヴィッチがいかにノスタルジーを語っているのかを理解しておく必要がある。そこで、以下の節ではその概観を示しておく。

2 アプリオリな感情

『不可逆なもの』の冒頭では、私たち自身が時間的な存在としてすでに常に不可逆なものであること、そして、不可逆な時は私たちのみならずすべてのものを包括するものであり、すべての出来事が不可逆であることが説かれている。また、時の不可逆性は、空間との対比においても確認される。空間上では可能である引

3 管見では、これら「閉じたノスタルジー」と「開かれたノスタルジー」を扱った研究としては、これまで三河（「郷愁の二重性と正当性」〔2010〕）とフランチェスコ・コルシーニ（「閉じたノスタルジーと開かれたノスタルジー」〔2010〕）によるものがある。

き返しという運動も、時間においてはその不可能性が約束されており、逆行は完全は無意味=無方向 (non sens) である。そうであれば、空間上での帰りは、時間上においてはなおも行きであるといえる。ジャンケレヴィッチによれば、時は完全なる一方向を約束するものなので、それは「出来事の一回性」を、つまり出来事はすべて最初で最後の回であることを保証するものである。すべての出来事が第一回目であるということは、同一性へ向かう真の反復も無いということになる。また、出来事の一回性は、すべての出来事があらわれると同時に、「取り消せないもの」と化すことによっても保証されている。

以上の『不可逆なもの』におけるジャンケレヴィッチの時間論は、三河が指摘している通り、決して「「時間とは何か」という懐疑的な問いとの格闘を期したのではない」(Mikawa 2010, 138-139 頁)。むしろ同書では、不可逆なものである時間に「すでに避けがたく見舞われてしまっている者が、それといかにかかわらざるをえないのか」という点を徹底的に言語化することが狙われている」(Mikawa 2010, 139 頁) のである。不可逆な時とのかかわりとは、抵抗、なれあい、同意の三つに大きく分類されるが、これらは『不可逆なもの』の第2章から第4章までの章題であり、それぞれの章でそれぞれの様態が綿密に叙述されている。人と不可逆な時との関係が抵抗から始められているのには理由がある。というのも、ジャンケレヴィッチによれば、「不可逆なものは、なによりもまず、癒すことのできない病、償うことのできない不幸として生きられている」(I/N, p. 154, 165 頁) からである。彼のこの言葉は、時間が不可逆であるという事実に対しては、人は一切変化を加えることはできないことに依拠している。

しかし、時のなかに存在する者はなぜ自身の不幸を認識するに至るのか。この問いに対する答えは、不可逆なものに対する私たちのある種特別な関係によって説明される。その特殊な関係を作り上げているのは、私たちの意識の作用である。ジャンケレヴィッチによれば、意識は相対的に未来と過去に向いているものであり、その働きは予期と記憶である。この意識の働きこそが、不可逆なものの看取を可能にしている。それゆえ、不可逆なものに対して、意識は全くの無力というわけでもなく、それに対して半一力 (demi-pouvoir) あるいは半一自由 (demi-liberté) を有するともいわれる。また不可逆なものの看取は、過去に起こった出来事とは二度と廻り合うことが出来ないという事実を知る、ということの意味している。そこに、「私から取ったものを返して下さい」という感情が生まれる。この感情こそがノスタルジーである。それゆえ、ノスタルジーとは私たちにアブリオリな感情であるともいわれる。

失われたものを取り返したいとする欲求は、過去の出来事を再び生き直したいという欲求である。意識はその過去を思い出としてではあるが、何がしかのかた

ちで魅らせ得る。それゆえに、私たちは過去へ思いを馳せずにはいられないのである。ところが、思い出は記憶の作用によるものでしかなく、過去の事実という不在ではあるが実在するものをかいま見させてくれるにすぎない。そもそも、逆説的なことにも、思い出すという行為が時の不可逆な流れのなかに包みこまれているのである。そのような思い出の半端な働きは、到達不可能な過去の事実を魅力的なものにし、ノスタルジーを両義的なものとして性格づける。それゆえ『不可逆なもの』において、ノスタルジーは甘く苦い、不幸な幸福、心地よい不幸、悲痛な甘美さ、メランコリックな感動などと形容されている。ただし、西村の指摘している通り、これらの語は、ロマン主義時代に成立した言語習慣を、ジャンケレヴィッチが踏襲したものであるという側面があることも忘れてはならない (Cf. Nishimura 1993, p. 235)。事実、ノスタルジー自体がロマン主義の一つの大きなテーマであったし、ジャンケレヴィッチの思想もその影響の下にあった。

それでは以上を踏まえ、以下で「閉じたノスタルジー」と「開かれたノスタルジー」について考察していく。

3 古代のオデュッセウスと近現代のオデュッセウス

『不可逆なもの』の最終章で、ジャンケレヴィッチはノスタルジーを「閉じたノスタルジー」と「開かれたノスタルジー」に分ける。これら二つのノスタルジーに冠された「閉じた」と「開かれた」という措辞は、確かにベルクソンのものであると看做される。しかしながら、これらの措辞は、ジャンケレヴィッチ自身の文脈において理解されるべきであり、厳密にはベルクソンのものとも区別される必要がある⁴。というのも、これらの語はノスタルジー以外の問題を論じる際にも用いられており、すでにジャンケレヴィッチのものでもあるからだ。例えば、「閉じた経済」と「開かれた経済」(『二者択一』)、閉じたものとしてのイロニーと開かれたものとしてのフモール(『イロニー』)、あるいは閉じたものとしての冒険と開かれたものとしての冒険(『冒険』)などといわれる (Cf. Gouda 2003, 170-171 頁)。

以下では、上記の二つのノスタルジーの内実を明らかにしていく。その際に、『冒険』の第1章「冒険」第2節「美的な冒険」で展開されている議論も含めて

4 「閉じた」と「開かれた」がベルクソンのものであることは、三河やコルシーニらの先行研究でも指摘されているが、ジャンケレヴィッチによるこれらの語の用い方自体は、ベルクソンよりもむしろ『死』でも言及されているガブリエル・マルセルの「閉じた希望」と「開かれた希望」により近いものであると思われる (Cf. M, pp. 381, 415-416 頁)。

参照しておきたい。というのも、二つのノスタルジーはオデュッセウスを主人公とする叙事詩を中心に論じられているのだが、『冒険』においてもまったく同様に、オデュッセウスが取り上げられているからである。またそれだけでなく、そこにおいては「閉じたもの」と「開かれたもの」という術語が、オデュッセウスに関係するかたちで登場するからである。それゆえ、『冒険』で行なわれている議論は、『不可逆なもの』における二つのノスタルジーについて理解していくための補助線となってくれると考えられるのである。また、冒険とノスタルジーは、それぞれが未来と過去という正反対のものを対象としている。

『不可逆なもの』の最終章で分けられた二つのノスタルジー、すなわち「閉じたノスタルジー」と「開かれたノスタルジー」には、それぞれがそれぞれのモデルとなる叙事詩を有している。それらはまったく同じ名の叙事詩であるが、ただし作者は異なる。前者は、ホメロスによる『オデュッセイア』であり、後者は、ギリシャの詩人ニコス・カザンザキス（1883-1957）による『オデュッセイア』（1938）である。

周知の通り、古代の『オデュッセイア』においては、主人公のオデュッセウスが彼の故郷イタケーに帰還し、そこでの復讐劇を終えるところで物語の幕は閉じられる。この叙事詩においては、帰還のみが主人公の目的である。そこで、「閉じたノスタルジー」は「最も簡単で最も楽観的なノスタルジーの基本的なかたち」であるとされ、「帰りが行きをまったく補償しつくすことのできる」（*I/N*, p. 349, 376 頁）ものであるとされている。

それに対し、カザンザキスにおいては、ホメロスのオデュッセウスが帰還したところから物語は始められ、その後日談が語られている。カザンザキスの描く現代のオデュッセウスは、故郷であるイタケーから抜け出すために、さらなる旅へと出発する⁵。

またカザンザキスの物語の役割は、ジャンケレヴィッチによる独特なホメロスの『オデュッセイア』解釈を跡づける役目も果たしている（*Cf. I/N*, pp. 358-360, 386-388 頁）。その解釈とは、帰郷したオデュッセウスには失望を読み取ることができる、というものである。この解釈の根底には、本論考の第2節においても確認した、時間による空間の包括がある（*Cf. I/N*, p. 369, 399 頁）。空間上で故郷に帰還したとしても、時間を戻すことは不可能なので、オデュッセウスは彼が去る

5 カザンザキスのオデュッセウスは、自分を束縛するあらゆるものから自由になるために旅に再出発するのである。主人公は、自身の知る故郷が無いことを悟った後、永遠に帰らぬ旅に出る。彼は、クレタ、クノッソス、エジプト、ナイルなどを旅し、神と語り合い、南極まで到達し、死に至る。彼は彼の身体からも解放され、ようやく自由を手に入れる。

前のイタケーへ戻ることはできない。故郷も、故郷の者達も、さらにはオデュッセウス自身が別のものになってしまっているのである。その事実で失望して、現代のオデュッセウスは、再び、しかし今度は帰還なき旅へと出発するのである。ここでの失望は、「時の空間化の幻想の後で、空間の時間化が、帰郷後われわれを失望と真実とに対峙させる」(I/N, p. 372, 402 頁) ことによる。そこで、「もし帰郷の欲求が閉ざされたノスタルジーの徴候ならば、ノスタルジーに捉えられた男を帰郷後に襲う失意と、この失望の結果としての無限の旅行意欲は、開かれた郷愁の徴候だ」(I/N, p. 360, 389 頁) と述べられる。

また、これら二つのノスタルジーはただ並列されているだけではなく、ジャンケレヴィッチによって優劣の判断が下されてもいる。すなわち、一方で、「閉じたノスタルジー」の者は、否定的に「偽りの旅人、悪い旅人、出不精の旅人」などと呼ばれるのに対し、他方、「開かれたノスタルジー」の者は肯定的に「ほんもののノスタルジーの旅人」と呼ばれるのである (Cf. I/N, p. 382, 412 頁)。これらの言葉のなかに、「開かれたノスタルジー」の「閉じたノスタルジー」に対する優位性が認められる。

では、『冒険』ではどうか。同書においても、ホメロスによる古代のオデュッセウスは偽の旅人、仕方なしに冒険をしている者、天性からの出不精であるとされている (Cf. AES, p. 840)。その理由もまた同様なものであり、古代のオデュッセウスの冒険は、ただ彼の家に帰るといふことしか希求していない。それゆえ、こちらは「閉じたもの」としての冒険である。

「開かれたもの」としての冒険のモデルは、カザンザキスのオデュッセウスではなく、今度はダンテの『神曲』に登場するオデュッセウスである (ただし、『不可逆なもの』でもダンテのオデュッセウスは「開かれた」冒険の例として言及されている)。ダンテのオデュッセウスは、ヘラクレスの柱を飛び越え、地中海を去り、広大無辺なる海へと飛び出していく。「近代の主人公にとって、循環は開かれており、循環的な周遊は直線的な旅となる。その旅は、新たな世界への、未知の土地、すなわちテラ・イグノタ (terra ignota) への、つまり奇妙であり、空想上のものである国への旅である」(AES, p. 841)。そして、近代の冒険は「帰還なき出発」であり、「閉じたものに対する開かれたものとして、古代の旅に対立している」(AES, p. 841) ともいわれる。このような者こそ真の冒険者であり、ジャンケレヴィッチが冒険好きと呼ぶ者のことである。

ところで、ここで取り上げている『冒険』の「美的な冒険」と題された節では、最後に芸術作品と冒険が比較され、その上で冒険の在り方が示される。これら両者は有限と半一有限で、芸術作品は、始まりと終わりを有するが、冒険は始まりを持つものの、終わりを有していないものであるとされる。もし芸術作品のよう

に、冒険に始まりと終わりがあるとすれば、それは冒険であることをやめる (Cf. *AES*, pp. 843-844)。したがって、「冒険は、いわば、流れ動く作品であり、常に未完のものである」(*AES*, p. 844) ということになる。そのような冒険の有り様は、ジャンケレヴィッチ自身が述べているように、人の生のメタファーでもある (Cf. *AES*, p. 854)。

以上が、『不可逆なもの』及び『冒険』で論じられている「閉じたもの」と「開かれたもの」をめぐる議論であり、それらのモチーフとしての古代と近現代のオデュッセウスについてである。これら二つの書の比較においては、多くの共通点が指摘された。ここで、以上の議論を整理しておけば以下のようなになる。

まず、「閉じたもの」は、ノスタルジーにおいても冒険においても、これらは共に目的地を持ち、空間上の移動が主たる目的である。それゆえ、消極的な意味を有するものであったが、それはノスタルジーにおいては時間の作用によって実現不可能なものであった。これに対する「開かれたもの」の特徴は、時間性にあるといえるだろう。また、冒険においてもノスタルジーにおいても、「どこでもないところ」が目指されるべき場所として挙げられている。

要するに、冒険においてもノスタルジーにおいても、問題とされているのはそれらの持つ時間性であった。しかし、未だ疑問は残る。というのも、「開かれたもの」の性格は、冒険に対しては容易に理解されるものの、ノスタルジーに関してはそのようにはいかないからである。確かに、冒険が芸術作品のように閉じられているか、あるいは目的地が予め定められ帰ってくる場所を有する場合は、それはもはや冒険とはいいい難いだろう。しかし、ノスタルジーであるとされつつ、無限の旅行意欲をその性格とする「開かれたノスタルジー」とは如何なるものなのか。また、なぜ「どこでもないところ」を目指すと言われるのか。これらの疑問について考えるためには、「開かれたノスタルジー。遠い祖国」と題された、『不可逆なもの』第6章第5節を詳しく読む必要がある。

4 取り消せないもの、あるいは出会ったことのないものとの再会

再び確認しておけば、「開かれたノスタルジー」は「閉じたノスタルジー」の者が帰郷することで失望し、それに続いて起こる無限の旅行意欲であった。ところが、この指摘がなされたすぐ後の箇所、ジャンケレヴィッチは「閉じたノスタルジー」の者のなかに見いだされる「開かれたノスタルジー」を説いてもいるのである。以下のように述べられる。

帰還の瞬間に、それまでノスタルジーに捉えられていた男がいまは希望を叶

えられて故郷の地に足を踏む瞬間に、ふたたび出発しようという情熱が誕生するだけではない。この情熱は、その前にひそかに存在していた。おそらくは、ノスタルジーに捉えられ流浪していたあいだにすでに存在していたと考えねばならない。告白することができなかったこの情熱を、ノスタルジーが遡及して姿を現せさせるのだ。帰郷者の失望が、異郷での生活のひそかな喜びを事後に明確に意識させるのだ。

(*I/N*, p. 363, 392-393 頁.)

ここでは「閉じたもの」と「開かれたもの」の関係性が問題とされている。引用箇所では、「閉じたノスタルジー」の者がすでに、「開かれたノスタルジー」の無限の旅行意欲を潜在的に有していることが述べられている。ジャンケレヴィッチによれば、古代のオデュッセウスも、帰郷する以前に帰郷に伴う失望を予感しており、それゆえカリュプソーやキルケーのところで、あるいはアルキノオスの宮殿でいくばくかの時を過ごし、彼自身の帰還を遅らせた。このようなオデュッセウスの目的は旅それ自体であるといえる。そこで、帰還したオデュッセウスは異郷での生活のひそかな喜びを事後に明確に意識するのである。それゆえ、ノスタルジックな者は、「遠く失われた祖国の哀惜と、帰郷して、しくじった冒険に対して覚える哀惜」(*I/N*, p. 366, 396 頁)の二つの哀惜のあいだを揺れ動く、と述べられる。

以上の説明から、「閉じたノスタルジー」と「開かれたノスタルジー」が、単に時系列上に配置された二つの現象であるというわけではないことが理解される。なぜなら、新たな出発が帰郷に続き、帰郷に潜在するならば、反対に出発が更なる帰郷に続き、あるいは潜在的に帰郷のなかに属すると考えられているからである。すなわち、「閉じたノスタルジー」の根底には潜在的に「開かれたノスタルジー」が潜んでいるのである (Cf. *I/N*, p. 364, 394 頁)。このような点に、不可逆な時と関係を持つというノスタルジーの本来の性質及び、「閉じたノスタルジー」に対する「開かれたノスタルジー」の優位性が確認される。

ところで、「開かれたノスタルジー」の対象は「どこでもないところ」とされていた。では、この「どこでもないところ」とは、具体的に何処のことを指すのであろうか。「どこでもないところ」が指し示すものを理解するためには、本稿第2節で行なった考察を思い出す必要がある。ジャンケレヴィッチによれば、そもそもノスタルジーとは、私たちが不可逆なものであることに発するアプリオリな感情であった。それゆえ、実際にはそれが具体的な対象を持つことはないので、すべての過去の出来事がその対象となる可能性を有するのである。また、その対象は過去の事実であるので、「どこでもないところ」とは、空間上における場所

の範疇から逃れる実在しないが確かに存在するもの、すなわち過去の事実のことであるとされる (Cf. *I/N*, p. 361, 390 頁)。ただし、すべてを包括する不可逆な時の働きによって、それを取り戻したいという欲求は満たされることはない。それでも、「開かれたノスタルジー」の者は未来へと開かれた時のなかに身を投じ、そのなかで再び失われたものとの不可能な出会いを求め、探し続けるのである。そのため、「開かれたノスタルジー」の代表者である現代のオデュッセウスは、予測不能な出来事に富んだ、未来が現在となる流れのなかに身を置くことを望む。

しかし、ノスタルジーの本質的な姿として「開かれたノスタルジー」が以上のように説明されれば、すぐに疑問がわいてくる。それでは、再会不可能なものとの再会を求める者に希望はあるのか、と。またさらに、そもそも冒険を論じる際にも確かめられていたように、あるいはダンテのオデュッセウスがそうであったように、無限の未来に開かれた時においても、人間は死が運命付けられているがゆえに有限なのではないのか、と。最後にこの問題について考察して、本稿を閉じることにする。

結局、「開かれたノスタルジー」を語るジャンケレヴィッチは、不可逆な時への同意を語っているように思われる。というのも、何度も確認したことだが、「開かれたノスタルジー」の者は、開かれた冒険のものと同様に、開かれた時のなかに身を投じる者の謂だからである。また、『不可逆なもの』の末尾で語られている内容は、同書の第4章「不可逆なものへの同意」で述べられている内容に重なるからである。ただし、冒険とは異なり、未だその営みがノスタルジーに由来するものであるとされる所以も同時に考える必要はある。

ジャンケレヴィッチによれば、「開かれたノスタルジー」の者には、希望が二重に与えられているが、それは時間上においてのみ見いだされる希望である⁶。一つ目の希望は、過去の事実が取り消すことができないことに依る。不可逆な時に同意し、開かれた未来を希求するということは、結局、取り消せないものを確かなものとして引き受けることでもあるからだ。『不可逆なもの』の第4章では、未来へ自己を開くことは、過去を捨て去ることでは決してないこと、そして、そのような者は、将来のために過去を同化する (assimiler) ことが述べられている

6 以下で論じる『不可逆なもの』における再認識の問題は、『何だか』(第2巻)で論じられている、二つの逆説的な再認識の問題と同じものである。第一の逆説的な再認識は、「すでに知っていることを学び、すでに見つけたものを見つけ出し、存在するものになる」ことである。それに対して、より本質的なものとされる第二の逆説的な再認識は、「知らないものを再認識する」ことである。本論考での再認識に関する考察は、『何だか』(第2巻)を参考にしつつ行なった。

(Cf. *I/N*, p. 234, 250 頁)。そのため、『不可逆なもの』の末尾では、「ノスタルジーに捉えられた者は、見つけたものをなおも探す。だが、探す瞬間にすでにみつけたのだ」(*I/N*, p. 385, 416 頁)という、一見矛盾しているかのように思われる言葉が述べられる。換言すれば、人はすでに見つけたものでなければ探すことは出来ないということである。すでに見つけたものは、たとえば実体的なものではないにせよ、いつも所有しているものである (Cf. *JNSQ* 2, p. 157)。二つ目の希望も、一見矛盾しているような言葉で語られる。

自分の源泉、起源、無心さに年老いて戻る人間は、自分が決して行ったことのないところへ戻り、かつて見たことのないものを再び見るのだ。しかも、この誤った再認は真の再認よりもいっそう真実である。

(*I/N*, p. 386, 416 頁.)

上の引用で述べられている真の再認とは、すでに見つけたものを再認することである。対して、それよりも本質的なものとされるのが誤った再認である。ここでの誤った再認とは、引用の通り、行ったことのないところへ戻り、見たことのないものを再び見ることである。この誤った再認は『何だか』(第2巻)においても、より深くより本物の再認であるとされている。なぜなら、それは新たなもののうちに古い記憶を認めるものであり、それゆえ心を揺さぶるものであるからだ (Cf. *JNSQ* 2, pp. 159-160)。この古き新しさの神秘、いまとかつての間で起こる転倒は、未来が現在となる開かれた時の相の下に起こるものであり、未来に期待されるべきものである (ただし、いつその機会が訪れるのかは誰にも分からない)。このことを示唆して、ジャンケレヴィッチは『不可逆なもの』の第5章において、「幸福は流星に似ている。幸福もまた流れた。しかし、おそらくは、違ったかたちで、望ましい現在をわたしたちはふたたび見いだすことだろう。取り逃したある春、失われたある機会の代わりに、なんと多くの機会、なんと多くの春が、未来が現在となる流れと冒険とに身を委ねるものにはなお提供されることだろう」(*I/N*, p. 259, 277 頁)と述べている。かくして、ジャンケレヴィッチのいう「開かれたノスタルジー」の者とは、過去の事実を引き受けつつ、未来の真の誤った再認を希求する者のことなのである。

文献

参考文献の引用及び参照箇所は、略号、ページ、(邦訳頁)の順に記す。邦訳のあるものについては、便宜上訳語を変えたところもある。

一次文献

- PP *Philosophie première, introduction à une philosophie du « presque »* (1953) (Paris: Presses universitaires de France, 2011).
- AES “L’Aventure, l’ennui, le sérieux (1963),” Françoise Schwab, ed., *Philosophie morale* (Paris: Flammarion, 1998), pp. 815-990.
- MC “La Mauvaise Conscience (1966),” Françoise Schwab, ed., *Philosophie morale* (Paris: Flammarion, 1998), pp. 31-202.
- M *La mort* (Paris: Flammarion, 1966) [仲澤紀雄訳『死』(みすず書房, 1978年)] .
- JNSQ 1 *Le Je-ne-sais-quoi et le Presque-rien, tome 1, La Manière et l’Occasion* (Paris: Flammarion, 1980).
- JNSQ 2 *Le Je-ne-sais-quoi et le Presque-rien, tome 2, La Méconnaissance, le Malentendu* (Paris: Flammarion, 1980)
- I/N *L’irréversible et la nostalgie* (Paris: Flammarion, 1974) [仲澤紀雄訳『還らぬ時と郷愁』(国文社, 1994年)] .
- Inach *Quelque part dans l’inachevé* (Paris: Gallimard, 1978) [仲澤紀雄訳『仕事と日々・夢と夜々』(みすず書房, 1996)] .
- VL *Une vie en toutes lettres: lettres à Louis Beauduc, 1923-1980*, Françoise Schwab, ed., (Paris: Liana Levi, 1995).

二次文献

Berlin 1999

アイザイア・バーリン, ヘンリー・ハーディ編, 田中治男訳『バーリン ロマン主義講義』(岩波書店, 2000).

Corsini 2010

Francesco Corsini, “Nostalgie close et nostalgie ouverte – *Enjeux éthiques et politiques*,” Enrica Lisciani Petrini, ed., *In dialogo con/En dialogue avec Vladimir Jankélévitch*, (Paris: Vrin-Mimsis, 2010), pp. 143-151.

Gouda 2003

合田正人『ジャンケレヴィッチ——境界のラブソディー』(みすず書房, 2003).

Hansel 2012

Joëlle Hansel, *Vladimir Jankelevitch - une philosophie de charme*, (Paris: Manucius, 2012).

Jerphagnon 1970

Lucien Jerphagnon, “Le thème de l’ipseitas moritura dans œuvre de Vladimir Jankélévitch,” Françoise Schwab, ed., *Présence de Vladimir Jankélévitch: le charme et l’occasion* (Paris: Beauchesne, 2010), pp. 159-171; Publié antérieurement in *Revue philosophique de la France et de l’étrange* (3, juillet-septembre) (Paris: Presses universitaires de France, 1970), pp. 287-298.

Kazantzakis 1938

Nikos Kazantzakis, trad., Kimon Friar, *The odyssey – A modern sequel* (New York: Simon and Schuster, 1958).

Mikawa 2010

三河隆之「郷愁の二重性と正当性——ジャンケレヴィッチのオデュッセイア解釈をめぐって——」『哲学の探究』(37) (哲学若手研究者フォーラム, 2010), 137-152頁.

Montmollin 2000

Isabelle de Montmollin, *La philosophie de Vladimir Jankélévitch: sources, sens, enjeux*, (Paris: Presses universitaires de France, 2000).

Nishimura 1993

西村清和『フィクションの美学』（勁草書房，1993）.

Tozawa 1983

戸澤義夫「シャルムとその両義性—— V.ジャンケレヴィッチの形而上学——」東京大学美学藝術学研究室編『美学史論叢』（勁草書房，1983）.